

## ～子どもたちを支援している方々からの聴き取りについて～

計画策定にあたり、子どもたちと直接関わりのある方々に子どもたちの現状の聴き取りを行いました。その主な内容は次のとおりです。

※聴き取りした施設等が特定されないよう、データなどの具体的な内容や名称等については記載していません。

### 1. 児童養護施設

#### ○入所事由について

- ・両親を亡くしたことによる入所は少ない。孤児以外については、親の居所不明、育児放棄、虐待など。
- ・ひとり親世帯の児童の割合が高い。また、多くのケースが複合的な事由による入所となっている。
- ・入所している児童の親はほぼ「貧困」の状況にあり、「貧困の連鎖」の状況にあると言える。

#### ○教育環境等について

- ・卒園者の進路はほとんどが就職である。
- ・中学校3年生については塾に通学させている。塾の費用については措置費が適用されている。
- ・措置費については20歳の誕生日まで延長可であるが、誕生日から卒業までの間は措置費の適用がない状況である。この間の学費等については奨学金や本人のアルバイトで工面するものの、経済的に厳しい状況にある。
- ・進学をあきらめる理由はほぼ経済的な問題といえる。
- ・進学する子どもが増えれば、ほかの子どもたちのモデルにもなり意欲にもつながると考える。

#### ○退所後のフォローについて

- ・退所後は徐々に施設と疎遠になり、その後の動向等は分からない事が多い。
- ・住宅を借りる際などは身元保証人確保事業が活用出来るが、更新時も活用出来るにも拘わらず、本人等の認識不足等により活用されないケースもある。

#### ○生活環境等について

- ・外部との関わりは学校が中心。地域の行事や祭りにも参加、スポーツ少年団等に加入している児童もいる。
- ・児童の友達も頻繁に施設に遊びに来ている。

#### ○施設運営状況等について

- ・職員の配置基準が改正されてきている経緯はあるものの、職員は未だ不足している状況にあり、研修参加なども難しい。
- ・子どもの成長にとっては大人との十分なふれあいが必要でもあり、十分な職員配置が必要。

### 2. 母子生活支援施設

#### ○母親の状況について

- ・現在はほとんどのケースがDVによる入所である。また、母親が精神的な障害があるなど複合的な要因を抱えているケースが多い。また、母親の低年齢化が進んでいる。
- ・ほとんどの母親が自身も親から虐待を受けるなどといった家庭環境で育っており、いわゆる貧困の連鎖が見られる。

#### ○母親の就労・収入状況について

- ・正規雇用となる方は少ない。非正規の雇用がほとんど。子どもが小さいと職場が限られていることから、非正規雇用となるケースが多い。
- ・現在、養育費が得られている方は稀である。

### ○子どもの学習環境等について

- ・子どもたちは基本的な生活習慣・学習習慣が身につけておらず、学力は低い。
- ・施設では基本的な生活習慣を身につけるという趣旨で宿題を一緒に行っている。
- ・学習塾から講師が来て施設で講義をしていただいております、通常より低い設定の費用で講義が受けられるようになっています。
- ・子どもたちからは学習意欲はうかがえるが、母親への遠慮や進路へのあきらめがみられる。
- ・母親自らも高校を中退するなどしており、学習や進路に対する母親の意識が低い。
- ・施設では進路に関する親の相談対応もしており、意識の改善なども見られる。
- ・子どもが通う学校と月一回情報交換会を行うなど、学校との連携体制はとれている。

### ○退所後のフォローについて

- ・子どもについては、月1回の退所児童との食事会の機会を設けている。
- ・退所した母親については、電話相談を受け付けている。手当の手続き、養育、母親自身の相談についてなど様々な相談が寄せられている。

### ○そのほか課題について

- ・地域で自立した生活では相談出来る場所が限られており、相談窓口やサロンの必要性を感じている。
- ・母子の問題が複雑化し、多様化している。職員は連携した対応を行っているが、勤務時間外での対応も多く、人的配置が課題となっている。

## 3. 子どもの学習支援団体

### ○対象者・利用者

- ・生活保護世帯及び児童扶養手当(一部・全部)受給世帯、就学援助を対象として、小学生から高校生までの児童生徒の学習支援事業を実施。(※実施地域により対象は異なる。)
- ・利用の契機は親からの申し出が多い。子どもや祖父母からの申し出、民生委員からの紹介事例もある。

### ○子どもたちの状況

- ・出席率は良好。欠席の場合もやむを得ない理由が多い。
- ・出席率が高い要因は学習意欲だけではなく、自己肯定が得られる場となっていることも考えられる。
- ・参加者の多くに意欲の高まりが見られる。ボランティア学生等のロールモデルとしての役割や、同じ境遇の子ども同士の関わりが要因として考えられる。
- ・発達障害、不登校の子ども割合が一般的な割合に比べると高い。
- ・学力は平均よりも低い傾向。支援開始前のテストでは0点や一桁点数の子なども多く見られ、アルファベットや分数の計算から教える必要のある子どももいる。
- ・親の最終学歴について、中学校卒(高校中退含む)という方も比較的多く見られる。

### ○親の意識等

- ・教室に参加させたことについて、良かったと感じている親がほとんど。
- ・高校までは行ってほしいという親がほとんどである。しかしながら、子どもへの期待感や関わりが不安定な親などもいる。
- ・子どもに期待する最終学歴は高校までという親が半数程度。一般的な進学率と比べると低い傾向。

### ○相談内容について

- ・親から相談は学費の相談や子どもとの関わり方などに関する内容が多い。